

# 乳児期の母子関係

## — Attachment の形成を中心に — (前編)

岡野雅子

### 序

子どもにとって「母親」とは一体何であろうか。「母親」とは子どもにとってどのような意味をもつものであろうか。

この問に対しては、従来の研究から明らかにされているように、母子関係は、その初期の結びつきのあり方が重要であって、それは子どもの精神発達に大きく影響を及ぼすものであるようである。人間の新生児の場合には、他の動物とは異って、非常に無力で生まれてきて受身的な存在であるので、特定な人すなわち母親への特殊な結びつきが形成されることは精神発達の上で重要な現象であろうと思われる。

ちなみに、母親と子どもの結びつきの形成の始まりは胎児期であるが、その後出産して母親と子どもは分離する。そして、その両者が結びつきを回復し、母親と子どもが相互作用を形成し保持してゆくプロセスが母子関係には最も基礎的な問題であろう。こ

の母親と子どもの初期の結びつきが近年「attachment」という用語で呼ばれる現象である。この attachment 行動——すなわち子どもの母親に対する愛着——は、無力な乳児期においてさえ、子どもの側から現われる現象であるということは、母子関係の相互作用を考へる時にきわめて重要なことであると思われる。

### 目的

乳児期における母親と子どもの結びつきの一つの特徴的現象である attachment の形成を、家庭児を対象として探る。

### 方法

- (一) 調査方法 母親との面接による面接法
- (二) 対象児とその母親

。対象児は一三〇名ですべて家庭で養育されている。ただし、母

親が仕事をもっている場合は、保育園などへ通園している子どもも含まれている。

○対象児の年齢を四分の一年ごとに区切ると表一の通りである。

attachment の形成に関する情報を得る意味から、一歳前後が適当であると考え、一応の目安として一歳プラスマイナス六か月（生後六か月から一年六か月まで）としたが、それ以前あるいは以後の子どもも若干含まれている。

○対象児の性別は男子六〇名女子七〇名である。

○対象児の兄弟順位は、第一子八〇名、第二子四五名、第三子五名である。

○母親の職業の有無に関しては、職業無一〇七名、職業有二三名で、家庭外に仕事をもっている母親の職業は、教師（短大、高校、中学、小学校）、保母、看護婦、会社事務員、組合事務員、電話交換手、デパート店員、喫茶店ウェイトレス、学生、大学研究生であり、家庭内に家事以外の仕事をもっている母親は、魚屋、菓子製造などの自営業、家庭内の内職などである。

○居住地は東京近郊。

○父親の職業は、ほとんどが俸給生活者で、自営が少数例ある。

○家庭の構成人員は、父親、母親、対象児である場合と、それに兄弟が一人あるいは二人が加わる場合がほとんどであり、いわゆる

る核家族である。その他の人が同居している例は五例あり、同居家族は祖父母、叔父などである。

(三) 手続き

知人の家を訪問したり、団地内にある公園などで子どもを連れて遊びに来ている母親に面接を申し込んだ。また、零歳児保育を行なっている保育園などに行き、夕方子どもをむかえに来た時に母親と面接した。

(四) 質問項目

一、摂食状況について。健康状態、栄養法、授乳のしかた、子どもの飲み方、それに対する母親の対処のしかた、離乳の時期及び状態。

二、object attachment について。object attachment（乳児期の特定の「物」への強い愛着行動）の有無、対象の種類、対象に対する子どもの反応、指しやぶり（広義の object attachment の一つと考えた）の有無。

三、養育行動について。養育者は誰であるか、attachment の形成されている対象は誰であるか（これは養育者と同一人であるか）、一緒に遊ぶ人は誰であるか（これは attachment の形成されている対象と同一人であるか）、母親と子どもの遊びの時間量、母親と子どもの遊びの内容、どのような母親と子どもの相互作用が子

どもにより多くの満足を与えるか、子どもが泣いた時の母親の対処のしかた、それに対する子どもの反応。

四、attachment 行動の有無とその出現時期。attachment 行動パターンは Ainsworth(1963)の十二項目に依って九パターンを作った。

- 視覚的定位
- 差別的に泣く
- 差別的微笑発声
- 見えなくなると泣く
- 追従
- 安全基地からの探索
- 接触
- しがみつぎ
- あいさし

### 結果及び考察

#### (一) 母親への attachment 行動について

まず、それぞれの attachment パターンの形成について見てみよう。九パターンの月齢別出現率をグラフに示したものが図一である。なお、図一で同一パターンでありながらグラフが上下に変動しているパターンが見うけられる。本研究においては、たとえ、

現在月齢が進んでしまっているためにこの行動型が実際にはない場合でも「　がありましたか？」と質問することによって、以前にあった場合には「出現した」の方に分類している。従って、月齢が進んでいながら出現率が下降していること自身が矛盾となる。

このような結果がどこから生じたかという点、まず第一に、本研究が横断研究のためであって、対象児は、それぞれ別々の子どもを月齢の面から分類し、出現率を求めたものである。第二に、子ども間の個人差のためである。発達の要因を超えた大きな個人差があることを示していると解釈できるであろう。第三に、母親との面接において「そのような行動があったか忘れたか」と答えた母親が数人いたが、結果の整理上「出現した」には加えていない。そしてこの種の回答は、子どもの月齢が進んでいる母親に多かったようである。

○ 視覚的定位「お子さんは、あなたを見ることが出来る時は眼を向け続けて眼で追うことがありますか（ありましたか）。いつごろからですか」

このパターンは、最も早く現われ最も早く出現し終る。早い場合には、生後一か月齢で現われるが多くは三〜四か月齢で現われる。従って、三〜六か月児ですでに九四%の子どもに現われている。そして、それ以後は新たにこのパターンを現わす者は少な

い。すなわち、このパターンは、初めて出現する時期の幅が最も短い間に限られている(S・D・一・六〇)。また、全体で八八・五%の子どもに見られ、九パターン中二番目に高い出現率となっている。それはこのパターンが他の attachment パターンに先立つものであるために、母親にとって新鮮な感覚で把握することができたためでもあると思われる。しかしまた一方、このパターンが早期に出現するためにこのような行動型があったことは思い出すが、いつごろから現われていたかという点はわからない、と答えた母親が二〇名にものぼっている。

。差別的に泣く「お子さんは、あなた以外の人に抱かれると泣き出し、あなたが代って抱くと泣きやむといったような人見知りを出しますか(しましたか)。いつごろからですか」

このパターンは、いわゆる「人見知り」として一般に知られている現象である。それだけによく気づかれるものであるらしく「あった」と答えた者のうち「いつごろからかは忘れた」という母親はわずか一名である。出現時月齢は六か月に明らかなピークを示し、また出現率では六・一〜九・〇か月齢の間に著しく増加し、九か月齢以後ではあまり増加率は伸びず六〇%前後である。

この結果から、このパターンは、一般に人見知りとしてよく知られ、母親も注意を向けている割には、出現し終ったと思われる九

か月齢以後でさえも六〇%の子どもにしか現われておらず、残り四〇%の子どもは、この行動型を現わさないようである、と言えよう。

。差別的微笑発声「お子さんは、あなたと一緒にいる時の方が他の人と一緒にの時よりもよく笑ったり声を出しますか(しましたか)。いつごろからですか」

このパターンは、総じてどの月齢段階においても出現が少ない。平均出現率では最も低く四三・八%である。出現時月齢でも著しいピークが見られない。また半面、どの発達段階にも現われており、従って、発達の要因によって出現を予測することが割合に困難な行動型である。

。接触「お子さんは、あなたのひざによじ登り体にさわったり、顔や髪や衣服で遊ぶことがありますか(ありましたか)。いつごろからですか」

このパターンは、最も多くの子どもに見られたパターンである。出現率の平均は九二・三%にのぼり、特に九か月以後では一〇〇%の出現を示している。すなわち、月齢が進むにつれて出現も増加しており、ここに明らかな発達の要因を見ることが出来る。

「attachment」という語が示すように、attachment 行動は最も簡単な原始的意味では乳児が母親に対してくっつく行動である。

その点からすると、このパターンは attachment が最も端的に表われているパターンであるということができないのではないだろうか。それゆえ、いろいろな状況や条件を設定することなしにこの行動は起こりえて、多くの変化のある attachment 行動の基となる行動なのであろうと思われる。

また、直接的に母親の身体とかかわりをもつものであるから、母親自身がよく記憶することができ、それゆえ高出現率となっているのかもしれない。従って、実は他のパターンとでも同様に子どもは現わしているのだが、母親が気づかずにごしているのかもしれないということをお知らせしているのではないだろうか。

○しがみつき「知らない人がいる時やなにかこわい場面では、しっかりとあなたにしがみつくことがありますか（ありましたか）。いつごろからですか」

このパターンは、出現開始の時期が最も多岐にわたっていて (S・D・三・九七) 出現時期のピークがはっきりとしない。従って、この行動型は出現時月齢にもっとも個人差があるといえる。それは、子どもにしがみつきを起こさせるような体験が多く個人的事情によるものであり、その機会にいつ遭遇したかに大きく左右されていることよると思われる。

それでは、現在「しがみつき」が現われている場合には、どの

ような状況でそれが起こるのかを見てみると、月齢の低い場合には単純な物音による驚きや身体的危険のための恐怖など（例、動くおもちゃ、トラックの音、犬のほえる声）が多いのに対して、月齢が進むにしたがって未知のものや何かを暗示しているようなものなどに対する不安感（例、カーテンが夜ゆれる時）に変わっているようである。また「知らない人がいる時」は、どの月齢においてもしがみつきをひきおこす場合があるようである。

○見えなくなると泣く「あなたが部屋から離れてお子さんから見えなくなってしまうと、泣き叫ぶことがありますか（ありましたか）。いつごろからですか」

このパターンも、出現時期が広い範囲にわたっていて個人差が大きい。また、全体で五〇・八％の子どもにしか現われておらず、「差別的微笑発声」に次いで出現率の低いものである。これは、現在の都会の近郊においては住宅事情は非常に困窮しているため、ごく小住宅に住み、母親が子どもとの視界からはなれることが少ないことも一因であろうと思われる。なお、後述する母親の職業の有無と attachment 行動についてみた場合には、職業をもつ母親の子どもの方がより多くのパターンを示している。

○追従「お子さんは、ハイハイ（這い這い）できるようになりますがあなたが部屋から離れた時に泣き出すだけでなく、後を追ってく

ることがありますか（ありましたか）。いつごろからですか」

このパターンは、明らかな発達的变化を示すものの一つである。それは後追いつることが、その前提として運動機能の発達を待たなければならぬことに一部よると思われる。従って、六・

〇か月以前には出現している者はごく少数であるが、次の半年間、すなわち六・一―一二・〇か月に出現率は急上昇を示し、その半年間では最も出現率の増加が著しいパターンである。また、全体の平均出現率も六七・七％で三番目に多く現われている。一二か月齢以後だけをとってみると、九二・五％の高率を示している。従って、「追従」は attachment パターンとして最も一般的パターンの一つであるということができようである。

。安全基地からの探索「お子さんは、這うようになって他の人や物に興味を持ちはじめたさわりに行ったりする時に、なにか危険なことがあったり驚いたりした場合にすぐあなたの所へ逃げこむように戻ってくる場合がありますか（ありましたか）。いつごろからですか」

このパターンは、最も著しい発達の変化をとげているパターンである。それは「追従」と同様に、運動機能の発達を待たねばならない行動型のためでもある。また、九パターン中、最も後から形成され、最も後まで出現率が増加を続けている。それはこのパ

ターンそれ自身が attachment 行動の中でも後から発達するものであるばかりでなく、このパターンは出現の早期には母親によってはっきりと認知されることが困難であり、何度かたび重なるから気づかれるためであろう。

このパターンに関しては、他のパターンとは多少 attachment の内容に異なる特色があることに気づく。それは、母親を探索行動をする時の安全基地として使うということもなく、その前提として子どもが探索行動に出かけるということがある。この探索行動に出かけるという行動は母親から出てゆく行動である。一方、他の八つのパターンは母親へ向ってゆく行動である。従って、他の八つのパターンはその行動それ自身が母親への第一次的な attachment 行動であり、母親自身が子どもにとって目標であり目的であるが、一方、この安全基地として母親を使う行動型は、母親を求めることは同じであるけれどもそれは第二次的に派生した行動であって、それ以前の段階においてあの場所へ行けば安全であるというように思わせる経験ができていないければならない。その、以前の経験というのが第一次的母親への志向であるところの他の八つの attachment 行動に他ならぬのである。したがって、第一次的母親への志向行動が充分に安定してはじめて探索行動に出られるのであって、この「安全基地からの探

索」はそれ自身が attachment 行動の一つであると同時に、他の八つの attachment 行動がすでに充分形成されているかどうかのパロメータの役割をも持っていると言えよう。そして、このパターンが一番後から形成され始めて、著しい発達の変化を示し、六〇か月までには一人も現われていなかったのが一八・〇か月以後にはすべての子どもに現われているということは、他の attachment 行動の形成のための有効なパロメータとなることを裏づけているものと思われる。

。あいさつ「あなたがお子さんの許からしばらくいなくなつた後再び戻ってくると、お子さんは抱いてくれといっているように両腕をあげてあいさつしたり、明らかな喜びの表情で両手をたたいたりすることがありますか（ありましたか）。いつごろからですか」

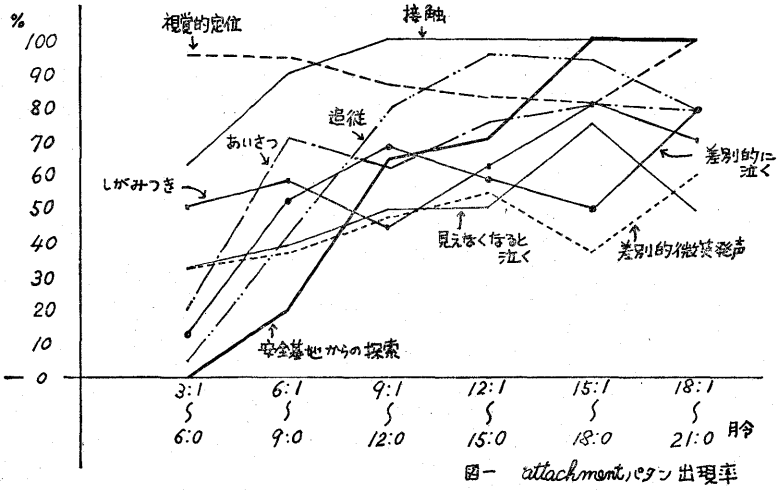
このパターンは、六・一―九・〇か月の三か月間に著しい出現率の増加を示し、その三か月間では最も高い増加率である。また、やや個人的状況の条件によってひきおこされる行動であるため、出現時期に幅があり個人差が認められる（S・D・三・一二か月）。また、「見えなくなると泣く」と同様に、職業をもつ母親の子どもの方が多く出現している。

以上の結果をまとめてみると、図一からも明らかのように「視

覚的定位」が最も早く形成され六・〇か月には形成され終つていくという例外を除くと、他の多くは六・一か月から一二・〇か月に形成されることがわかる。特に六・一か月から九・〇か月の三か月間は明らかな増加を示している。そして、一二か月以後は本研究の対象児数が少数であるために個人差の方が一般的傾向を凌ぐ結果となつてしまつたが、それでもなお確実に増加を続けているのは「安全基地からの探索」であることがわかる。

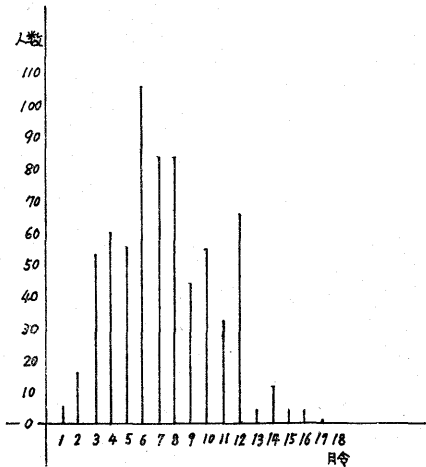
また、九パターンのすべてが必ずしもすべての子どもに現われるわけではないということが明らかとなつている。図三を見ると、attachment が形成され終つた段階において平均で七パターンとなつている。また、一般的傾向としては、attachment パターン数は月齢が進むのに伴つて増加しており、明らかな発達的变化があることが認められる。

次に、attachment パターンの出現時月齢を九パターン全部の延べ人数で表わした図二から、attachment の形成される時期は多くは生後一二か月までであつて、それ以後に新たに形成される例はごく少ない。この結果は、Bowlby（一九六九）が attachment の形成時期について指摘したものと一致している。したがつて、attachment 行動とはまさに乳児期の母子関係ということになるだろう。（つづく）（表と図は49頁）（群馬県立保育大学）

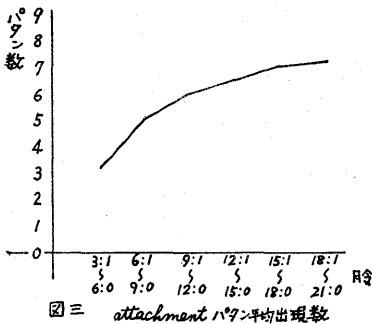


表一 対象児の月令と人数

月令	人数
0:1 ~ 3:0	0
3:1 ~ 6:0	16
6:1 ~ 9:0	31
9:1 ~ 12:0	31
12:1 ~ 15:0	24
15:1 ~ 18:0	16
18:1 ~ 21:0	10
21:1 ~ 24:0	2
計	130



図二 attachment パターン出現時月令と延べ人数



図三 attachment パターン平均出現数